



愛知県豊田市沖の伊勢湾で建設中の中部国際空港の総事業費が、当初計画7680億円より約15%、1200億円規模で圧縮され、約6500億円となるのが4日分かった。国土交通省によると、大型公共プロジェクトでは事業費圧縮の先例はない。運営主体の中部国際空港会社(平野幸久社長)による民間流のコスト圧縮や超低金利が奏功した。抜本的な事業費削減は、公共事業や特殊法人の改革にも影響を及ぼそつた。

中部空港建設1200億円節約

社長トヨタ系、競争原理徹底 民間流で費用15%減



中部空港は580万坪の人工島に3500坪滑走路一本を備えた24時間空港で、05年2月17日の開港予定。空港会社は管制施設や連絡橋などを除く

主要施設を整備する。内駅は①空港島本体②滑走路③旅客ターミナル④貨物ターミナルなど。各工事で競争原理や原価削減活動を導入、旅客

ターミナルのウイングは、折り鶴の羽のデザインから、部品を規格化できる真つすな形に改めた。好天や良好な地盤に支えられ工期が短くなった。

た効果も大きい。超低金利で、利払い費用も数百万円減つていくという。空港会社は削減額をふまえ、国交省との間で04年度予算の事業費要求額を詰める。8月の概算要求は計画の1249億円から100億円未満に減る見通し。空港会社は削減分で事業資金の6割を占める有利子負債を優先的に減らし、開港後の負担を軽くしたい考え。

中部空港は、公団や特殊法人ではなく、官民折半出資の中部空港会社に国が建設・運営を委託するPFI(プライベートファイナンス・イニシアチフ)に近い方法が取られた。社長も空港トップで初の民間人であるトヨタ自動車出身の平野氏が起用された。事業費の7680億円

(3面に「時刻表」)

曲線の美→直線の利

建設中の中部国際空港の旅客ターミナルビル。当初、翼をイメージしたウイングは直線に変更された。4日、本社へりから

については、政府関係者や土木専門家は「枠内で完成するのは無理」と断言していた。